

健康長寿と東洋医学

健康長寿が話題となる時、「生活習慣病の予防」という言葉がよく出てきます。がん、心疾患、脳血管疾患、糖尿病などの生活習慣病は、食事や運動、喫煙といった生活習慣を改善することによって発症の確率を下げるすることができます。これまで主に病気の治療を扱ってきた現代（西洋）医学も、最近は予防医学に力を入れています。

ところで、東洋医学（中医学）には、まだ病気になっていない状態を表す「未病」という言葉があり、それを治す「治未病」は東洋医学の得意とする分野です。ここで現代医学と東洋医学の体系の違いを対比したのが表です。現代医学が細胞、組織、臓器といったミクロな部分から人体を見るのに対し、東洋医学は人体を全体としてマクロに捉えるところに特徴があります。

表 現代医学と東洋医学の体系の違い¹⁾

現代医学	東洋医学（中医学）
基礎医学（生理学、解剖学等）	中医基礎学（気血津液学説、経絡学説、臓腑学説）
病理学	病因学説、病機学説
診察学、診断学	四診弁証
治療学（外科治療、投薬等）	論治（方剤、経穴、手技）
臨床各論（内科、婦人科等）	臨床各論（中医内科、中医婦人科等）

健康長寿の願いは今に始まったことではありません。江戸時代に貝原益軒は、「養生訓」の中で、健康長寿＝養生（身をたもち生を養う）の術は、「身をうごかし、気をめぐらす」ことにあると語っています。

日本語には、元気、病気、気力、気質、気が合うなど、気をつく言葉が沢山あります。気を病めば病気になります。目に見えない生体が発するエネルギー「気」は、身体と心が一体であると考えた東洋医学の身体観の基本となる概念です。解

剖学や心身二元論に基づく現代医学の身体観とは大きく異なります。

ここで、目に見えるもの、言い換えれば科学的に実証できるものだけを信じる現代では、「気」は理解し難いかもしれませんが、気をつく言葉を更に探してみると、電気、磁気、空気など見えないけれど実体のあるものが身近に存在します。「気」が物理的、化学的に何であるかは、電気生理学の最先端の研究テーマにもなっています。

最近、光・色彩療法（特定の波長の光や色を用いる治療）、音楽療法（特定の周波数の音による治療）、アロマテラピー（固有の分子振動の芳香物質による治療）といった代替医療が広まっています。これらはいずれも波動（電磁波を含む）を通して「気」に影響を与え、治療効果を示すものと考えられています。

もう一つ「気」に関連する例として、オーリングテストという医療技術があります。人体は電磁場などによる微少な刺激を感じ取っており、その刺激に対して脳は無意識のうちに適・不適の判断をしています。その時、脳が筋力に及ぼす反応を読み取る方法がオーリングテストです。オーリングテストは、既に医療の現場で診断に利用されていますが、人体のこのような潜在能力を活かすことによって、薬や食品などの適・不適を瞬時に判定できる可能性を秘めています。

本県は、次世代の戦略的重点分野の一つとして健康長寿産業を掲げ、平成17年度から「あいち健康長寿産業クラスター推進協議会」を母体として、健康長寿産業のネットワーク形成を推進しています。現代医学とともに東洋医学の考え方を取り入れれば、新たな健康食品や健康機器の開発に繋がることが期待されます。産業技術研究所もそうした視点から研究開発を進め、健康長寿産業の発展に貢献したいと考えています。

1) 関口善太監修：東洋医学のしくみ，P41（2003），日本実業出版社



食品工業技術センター 発酵技術室長 近藤正夫(masao_3_kondou@pref.aichi.lg.jp)

研究テーマ：計測機器及び機能性食品の開発

指導分野：生物化学工学、計測工学